推進資料３

PDCA ×３回で不登校の未然防止を
～点検・見直しの繰り返しによる取組の推進～

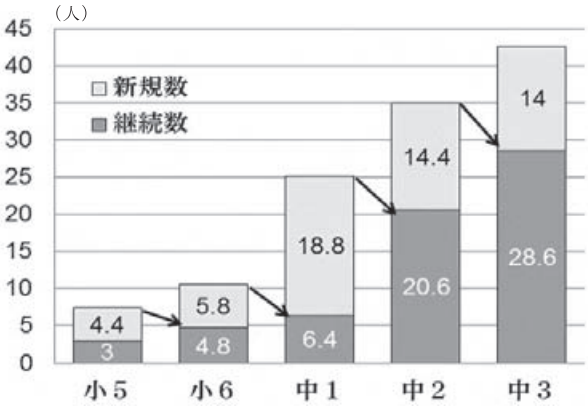
１　北管内の不登校児童生徒の状況から

右のグラフは，平成２４年度から５年間の問題行動等調査の結果を基に，学年ごとの不登校児童生徒数の平均を算出し，新規数と継続数に分けて示したものです。気になる点は，中１に急増する新規数と中２，中３と変わらずに出現する新規数です。

各学年の継続数は，前学年の新規数と継続数を合わせた不登校の合計数と比較すると矢印のとおり減少していることから，**新規数を減らすことが不登校児童生徒数を減少させる重要なポイントになる**ことが分かります。この新規不登校児童生徒数を減らすためには，**「居場所づくり」と「絆づくり」に取り組む**とともに，**生徒指導のＰＤＣＡサイクルを３回繰り返して機能させること**が効果的です。

平成２４～２８年度の問題行動等調査における不登校児童生徒数の平均（北管内データ）

□ 新規数：前年度不登校でなかった児童生徒数
■ 継続数：前年度も不登校であった児童生徒数



２　「居場所づくり」と「絆づくり」に取り組む

「魅力ある学校づくり」を進めるために，「居場所づくり」と「絆づくり」の違いを理解し，学校生活の大半を占める授業時間を中心に，教育活動全体を通じて，意図的に取り組む必要があります。

未然防止のための「魅力ある学校づくり」

教職員が児童生徒の**「居場所づくり」を進める**ことにより → 児童生徒一人一人が**安心して学校生活を送ること**ができ，**自尊感情を高めたり充実感を得たりする**ことが期待できます。

児童生徒が主体的に取り組む活動を通して**「絆づくり」を進める**ことにより → 児童生徒同士の多様な関わりの中で**自己有用感**や**社会性**が育まれ，仲間を支援できる**よりよい集団に成長する**ことが期待できます。

３　「生徒指導のＰＤＣＡサイクルを３回繰り返す」とは

魅力ある学校をつくるためには，児童生徒が学校生活をどう感じているのかを把握する必要があります。その確認は年に一度でよいのでしょうか。国立教育政策研究所がまとめた第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」の報告書には，右図のように**ＰＤＣＡサイクルを１年で３回繰り返すこと**で不登校児童生徒数の減少に効果があったことが示されています。右図の番号を基に流れを紹介します。

①②：児童生徒を対象とした意識調査による**実態把握から課題を分析し，目標を設定**します。その際，意識調査用紙等は，第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」の報告書を参考にします。

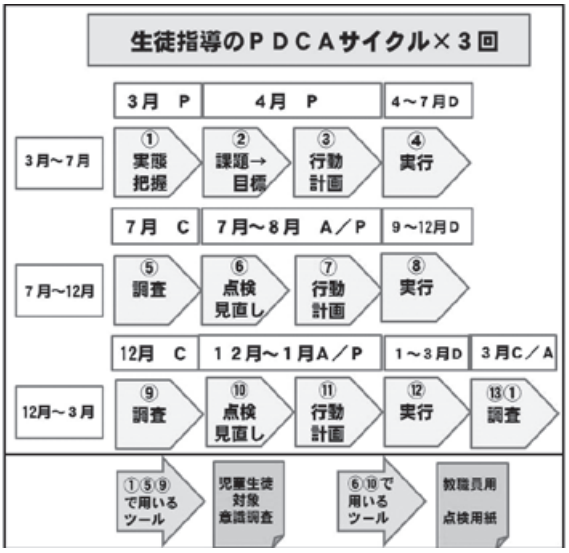
③④：「居場所づくり」と「絆づくり」の取組を生かしつつ，授業改善等の**計画**を**全職員で実行**します。

⑤⑥：再度意識調査を実施し，夏季休業中に，**取組の点検**を行います。その際，１学期に効果を上げた取組を共有し次につなげ，効果が上がらなかった取組については，課題分析は正しかったか，目標設定は具体的であったか，行動計画の策定過程に問題はなかったかなどの視点で**見直し**ます。

⑦⑧：**計画を修正し，２学期に再び全職員で実行**します。

⑨⑩：調査実施後，冬季休業中に**点検，見直し**をします。

⑪⑫：３学期に再び**全職員で計画を実行**します。



参考：第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」（平成２６～２７年度）報告書

４　ＰＤＣＡサイクルを繰り返す効果
［Ａ中学校（在籍数７２３名）の実践例］

第Ⅲ期「魅力ある学校づくり調査研究事業」の実践校であるこの中学校では，右図のように実践校共通の意識調査から課題を絞り，目標を設定しました。全職員が意識して，生徒の自己有用感を高める取組や授業改善に取り組み，長期休業中に再調査や点検・見直し等を行いながら，生徒指導のＰＤＣＡサイクルを年３回繰り返して機能させた結果，多くの生徒の意識に変化が見られました。年度末には項目ウの肯定的評価が，全体で８８％（当てはまる５０％，どちらかといえば当てはまる３８％）に達し，不登校生徒数は前年度の１９名から１４名に減少しました。また，**「教職員の連携の深まり」や「教職員の意識の向上」などの成果**が見られたことも報告されています。

３月 ①
児童生徒用意識調査（３月）　当てはまる
ア「学校が楽しい」　５８％
イ「みんなで何かするのは楽しい」　６７％
ウ「授業に主体的に取り組んでいる」　２８％
エ「授業がよく分かる」　１５％
→ 最初の意識調査でウとエに課題が見付かりました。

４月～７月 ②③④
教師間の話合いの中で「子どもたちは学習の見通しをもてていないのではないか」「まとめや振り返りが不十分なため『分かった』という実感が得られていないのではないか」といった意見が出されました。そこで，この中学校では「主体的な学習態度の育成に向けて授業改善に取り組むこと」を目標にし，次のことに取り組みました。**「主体的に取り組む姿」の再定義付け　自己有用感を高めるための認め合う場面と学び合う場面の充実　「振り返り」の充実**

７月～８月 ⑤⑥⑦
児童生徒用意識調査（７月）　当てはまる
ウ「授業に主体的に取り組んでいる」　４０％
エ「授業がよく分かる」　２７％
→ 夏季休業中に再び調査し，取組の点検・見直しを行いました。

９月～12月 ⑧
効果１　全職員で改善に向けて，取組を協議することで，個々の職員の思い込みや認識のずれが修正されました。

12月～１月 ⑨⑩⑪
児童生徒用意識調査（１２月）　当てはまる
ウ「授業に主体的に取り組んでいる」　４６％
エ「授業がよく分かる」　３０％
→ 冬季休業中に再び点検・見直しをし，取組を修正しました。

１月～３月 ⑫⑬
効果２　全職員の共通理解が進み、実践が効果的に行われました。
児童生徒用意識調査（３月）　当てはまる
ウ「授業に主体的に取り組んでいる」　５０％
エ「授業がよく分かる」　３９％